

その日、その朝

その日、その朝、町外れの墓地区画で起きた出来事は、本来なら日常の営みのなかに収まるはずのものでした。一人の男がその前々日に死にました。死に方こそ十字架刑によるものでしたから、畳の上で亡くなるような通常のものではなかったけれど、死はいつも通りの仕事をして男を陰府に送りました。

その結果、その日、その朝、幾人かの婦人たちが仮埋葬された男に地上で彼女たちに出来る最後の心尽くし、敬弔の誠を尽くしに墓地に向かったのです。いちばん辛かった時はすでに終わり、死がすべての幕引きを終えていたので、彼女たちの心配事は、ルカはそのことを記していませんが、墓を塞いでいた石を自分たちだけで動かせるかということだったようです。しかし、行ってみると石は墓のわきに転がしてあって、中に入ることが出来て、しかもそこにイエス様のご遺体がなかったのです。婦人たちは夜明けを待って一番に墓へ出かけたのですから、一体、これはどういうことか、わかりませんでした。何が起きてしまったのか。イエスさまが亡くなられたのは金曜の午後3時過ぎであり、遺体を十字架から取り下ろし、検死が行われました。そのあとアリマタヤのヨセフという議員が、ピラトに申し出て、遺体引き取りの許可を得て、亜麻布でまき、岩に掘った墓穴にとりあえずおさめた。時間との競争で、これでギリギリだったでしょう。というのは金曜の日没から、土曜日が始まる。そして土曜日はユダヤ教では安息日、いっさいの労働が禁じられている日だったからです。埋葬といえども例外ではありません。すべてを手早く終えなければなりません。ですから金曜の午後遅くに主イエスが死んだあと、ほぼ時をおかずに安息日の土曜が始まった。それは人が手をふれてはならぬと神によって時の聖別が命じられた日でした。それによって神さまは人間を守ろうとされた

のです。こうして人の手を離れたところに、主イエスも、婦人たちも置かれたのです。こういう事情で、日曜の朝はやく、太陽が昇ると活動が可能となりますから、婦人たちは、整えておいた香料と香油をもって朝一番に墓に向いたのです。安息日が間に入った以上、誰も主イエスの遺体に触れることなど出来なかったはずなのです。しかし、墓をふさぐ石は脇に転がしてあり、イエス様の遺体はそこには見つかりませんでした。

2009年に、わたしは聖地旅行に行かせて頂いたので、福音書記者ルカのつたえる記事をある程度、立体的に思い浮かべることが出来ます。現在、主イエスの処刑の行われたゴルゴタの丘と埋葬場所となった墓地付近とされる場所は全体が建物で覆われて、聖墳墓教会となっています。聖なる、古墳の墳に、お墓と書きまして、聖墳墓教会、どこまでが史実であるか、突っ込むところがないわけではないのですが、十字架の杭を差し込んだ石の穴であるとか、ここにイエスの遺体を安置したといわれる石舞台や、当時にさかのぼる墓までもが、それほど大きくはないひとつの建物のなかに収まっているのです。ルカによりますと、イエス様の遺体を収めたのは岩を掘った横穴式の墓です。聖墳墓教会内にあった当時の墓地は入り口が140センチくらい、奥行きは4メートルほどはあったでしょうか。岩穴は段階的に狭くなり、一番奥の遺体を安置する部分は、いわゆる棺の高さくらいしか掘られていないお墓です。こういうお墓ですので入り口をふさぐ大きな石さえどかせれば、その日の朝の婦人たちのように、内部に入ることが出来、そこに遺体がないことに気づくのです。そして、途方に暮れていると、とルカは書いています。ここは面白い書き方がしてあって、空の墓の前で途方に暮れ続けているという状態なのです。この途方に暮れるという動詞は、新約聖書に数回しか使われていない動詞で、アポレオーという言葉なのですが、もともとはアポロスという名詞、これは否定を意味

する「ア」に「道・手段」を意味する「ポロス」のくっついた合成語です。つまり、道がない、手段がない、で途方に暮れるわけですね。ゆくかたなし、お墓から遺体が消えるわけがないのです。墓は人間の行きつく最後の場所なのですから、道はそこで終わりです。ところが人の行きつく先の道である墓にイエス様の遺体がないのですから、これは本当に途方に暮れるしかない。死という終わり、人間の道も、手段も尽きる場所である墓の前で、死に引き渡されたはずのイエスの体が見当たらずに狼狽える。途方に暮れ続ける。まさにフリーズしている状態です。これがその日、その朝に、わたしたちの代表が体験した出来事でした。ここから先は啓示の出来事となります。つまり信仰の体験になっていく。客観的な証明のできない体験者の証、証言として伝えられていった出来事です。証言にはその人の存在が賭けられます。信用がかけられる。たんなる噂話や根拠のないデマのレベルではありません。ユダヤ当局は話に尾ひれがついて広まったという見解を取って片付けようとしたのですが、噂やデマで人の生き方は変わりません。わたしたちは人の噂やデマで生き方を踊らされるような愚かな真似からは身を遠ざけておきたいと願うものです。しかし、この後の展開は明らかに違うのです。残された者たちは自分の人生や能力や財産、つまり命を賭けて、キリストの復活を信じて生き始めるのです。本物に出会った時に人は変わるのではないのでしょうか。彼らは確かに神の臨在を感じた。神が生きてわたしたちのために働かれ、イエスが復活されたことを信じさせていただいた。だからこそ、彼らの生き方は変わっていったのです。わたしは人の心が変わること、それによってわたしたちの生き方が変わることをこそ、奇跡と呼ぶべきだと思っています。その意味で言えば、あの日、あの朝、起きたことは紛れもない奇跡であり、ここから世界が変わり始めたのです。そしてそれは墓の前で、手段をなくし、道を見失って途方に暮れる婦人たちの前に輝く

衣を着た二人の人が現れ、呼びかけたことから始まります。さきほど、ここからは啓示の出来事だと言いました。神の啓示などという言葉が独り歩きすることもあります。これは人間の側からは開くことができない扉やカーテンのようなものでありまして、神様の側が開いてくれることによってその奥が見渡せるようになるのです。それゆえ信仰とはすべて神様の働き、神業であり、神の霊による働きであると言って良いのです。御使いが言ったことはシンプルです。あなたたちは、イエスから以前聞いていたはずではないか、というのです。まだガリラヤにおられたころ、お話になったことを思い出しなさい、と言うのです。あなたがたが体験していることをイエス様のお言葉にふれさせてみなさい、そう御使いは語ったのです。主イエスはあなたがたに何と語っておられたか、思い出しなさい、と伝えた。これこそ、わたしたちが毎週、礼拝に集い、行っていることです。わたしたちの周りには死が満ちています。途方に暮れる現実が溢れかえっている。そこでわたしたちに与えられているのは死に打ち勝たれた方の御言葉です。「あの方は、ここにはおられない。復活なさったのだ。人の子は必ず、罪人の手に渡され、十字架につけられ、三日目に復活することになっている、と言われたではないか」。ここに、途方に暮れるわたしたちに向けられた神の救いの呼びかけがあります。ここから始めることが許されているのです。わたしが途方に暮れる場所、手段がない、どちらに進んでいいかわからない、道がないと立ち尽くす場所は、しかし、すでに終わっているのです。死はキリストを陰府に留めておくことは出来なかった。ここにはおられない、という宣言をどのように受け止めるか、それは神さまご自身が、わたしたちのために、キリストの死と復活を通して別の道を開いて下さったということです。そして、その道は聖書に啓示されている。わたしたちは死の匂いのする世界に生きているから、日曜のたびごとに、主の復活の朝ごとに、御前に出て死

者の中から復活された主イエスのお言葉を聴くのです。ここから新しい一週間が始まるのです。時間が聖別され、わたしたちの存在が新しくされる出来事、罪が十字架に打ち付けられていることを知り、これから闇が深くなって夜が来て、全てが終わりになるのではなく、現在の暗さはここから夜明けに向かっていく最後の時であることを確認するのです。そのための日曜礼拝なのです。毎日曜の礼拝はいつも毎週が小さなイースター礼拝なのです。御言葉のなかにある命にふれたとき、わたしたちは新しくされます。婦人たちは神の使いの勧めに聴き、御言葉を心の内に反芻して、思い至りました。そして目を開かれ、喜んで仲間の婦人たちのところに帰り、墓が空であったこと、主が復活されたことを一部始終知らせました。この知らせを聞いたのはマグダラの MARIA、ヨハナ、ヤコブの母 MARIA、そして一緒にいた他の婦人たちであったとルカは記しています。この婦人たちのことを福音書記者ルカはずっと記してきました。男性で固められていた十二弟子、ここでは使徒たちと書かれていますが、彼らは婦人たちの伝えたことを戯言のようだと思い、信じなかったと書かれています。死の現実が使徒たちの目を塞ぎ、曇らせていたからでしょう。御言葉が真実になるには動かしがたい現実を突きつけられて途方に暮れること、それが他人事ではなくて我が事となることが必要です。このときペテロがそれでも墓に走っていったのは流石だと思います。確かめに行った。しかし同じことは起きなかった。シモン・ペテロは空の墓と中に残された遺体を包んでいたはずの亜麻布をみて驚きながら家に帰ったとあります。このあとルカは美しいエマオのキリストの復活顕現を伝えます。復活の主が初めて弟子たちの前に姿を表された様子をルカは生き生きと描き出します。そして、この出来事の結末のところ、二人の弟子たちがイエスだと気づいて「道で話した時、聖書を説明して下さった時、わたしたちの心は燃えていたではないか」と言って、エルサレムに

引き返してみると、残されていた使徒たちも大騒ぎで、34 節に「本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた」と記すのです。ルカは復活の主とシモン・ペテロの出会いを記さなかった。しかし、空の墓をみて驚きながら家に帰ったペテロに、復活の主がご自身を現されたことをこういう仕方でも描きました。ひとりとして同じ出会いをする者はいないということでしょう。しかし、誰も復活の主の訪れから漏れる者もいないのです。すべては神のなせる業、行き詰まり、途方にくれるわたしたちを上から捉える神の救いの出来事、その日、その朝、婦人たちを驚かせた出会いの真実は今も時を超え、場所を超えて神の憐れみによって真実としてわたしたちに起こされ続けています。「なぜ、生きておられる方を、死者のなかに探すのか、あの方はここにはおられない。」

途方に暮れる婦人たちに呼びかけられた主の御使いの声の前に、わたしたちも静まり、主イエス・キリストの言葉を思い起こし、わたしたちの体験を委ねます。そして罪と死に勝利された救い主の御足のあとを追う1週間の働きを始めます。主は死に勝利をされた！ハレルヤ！

お祈りいたします。